

1. 侍ジャパンの戦いにみるリーダーの役割

3月8日に始まり3月21日に終了した野球の国際大会WBC。MVPに選出された大谷翔平選手の活躍やチーム最年長ダルビッシュ有選手のまとめ役に関心が寄せられています。メキシコ戦で同点ホームランを放った吉田正尚選手らの野手、若手中心の投手陣等の頑張りも注目です。

試合をするのは勿論選手達です。しかし私はその選手達を縦横無尽に使いこなした監督やコーチ陣の動きにも注目すべきではないかと思っています。侍ジャパンを会社に例えると監督は社長、コーチ陣は部長ら経営管理者、選手達は現場で働く社員と見做すことができそうです。監督がコーチ陣に適切な指示出しをし、コーチ陣が個々の選手の能力を完璧までに発揮させる。このスキームが世界1という栄冠を手にした背景にあったのではないのでしょうか。

本稿では侍ジャパンの監督であった栗山英樹氏のリーダーシップについて取り上げてみたいと思います。リーダーシップとマネジメントとは異なります。リーダーシップは「何をし何をしないか」を決めることで、英語ではWHATとなります。監督はWHATを断固たる信念で決定しチーム内に浸透させなければなりません。監督は「これを行いたいのか」「これをしないのか」の何故をコーチ陣や選手達に説明する責任が生じます。WHY(の説明)がとても大事なのです。栗山英樹氏は監督就任後、米国のMLBで活躍する大谷選手らに何回も会いに行き、WBC参加を要請したそうです。この直接行動に意気を感じたのがダルビッシュ選手です。彼は2月17日から始まった宮崎キャンプに初日から参加し選手達のまとめ役を果たしました。正に栗山監督が「WBCで優勝する為にWHATとWHYを各球団や候補選手達に直接伝えてきた」効果の表れだったのです。

ヘッドコーチだった白井一幸氏はこう語っています。「今回重圧がすごかった。この期間中(栗山監督は)日に日にげっそりしていた。食事中、監督がぼそっと『10億もらってもできない仕事かもしれない』って言うほど大変だったと思う」。ストレスは強かったでしょう。組織を預かるリーダーの重圧の大きさを物語る逸話だと思います。

私は「のうりょく」は3つあると考えています。よく知られているのは能力です。「コトをなすパワー」と言っても良いでしょう。侍ジャパンの選手達の個々の能力がとても高かったことは理解できます。戦う前から「今回は過去と比較しても最強だ」という前評判でした。次は脳力です。個々の能力が高くてもチーム総合力が個々の選手の総和より低くなることはあり得ます。チームワークが悪く自己主張が高いと総合力はぐっと低くなります。先発メンバーと交代選手をどう組み合わせるのか、チーム力を総合的に組み合わせる為の工夫が脳力だと言えます。最後の「のうりょく」は脳力です。「これがベストだ」と信じて決しても、最後の最後まで「これ以外のベストの布陣はないのだろうか」と栗山監督は悩みに悩んでいたことでしょう。10回、いや100回超えても「やみにこれにいこう!」と決断する勇氣。リーダーにはこの脳力が必須なのです。そして後は選手(社員)を信じ、そして楽観的に行動するのです。

2. 今年の労働市場は大きな変化が起きるかも?

今年の賃金引上げ交渉が終わりつつあります。大手企業では労働組合の要求を丸呑みした満額回答が全体の約7割に達しています。5%前後の引上げ率が多いようです。非上場のアイリスオオヤマの大山社長がインタビューに「前期は減益となったが、各社の賃金引上げで内需拡大が進み業績UPに繋がれば」と期待感を示していました。

今春の賃金引上げの動きは今秋の最低賃金改定にも大きく影響を与えそうです。政府は全国平均で1000円到達を今年中に目指す方針です。現在の全国平均は961円ですから39円の引上げです。大分県の最低賃金は854円ですが、10月からは893円以上になる可能性があります。

最低賃金等賃金引上げは従業員も単純に喜べません。働きたくても社会保険加入義務が発生する年収130万円(又は106万円)の壁があるからです。概ね給与の1/2の社会保険料負担を強いられます。パートは賃金UPを喜んだもの手取り収入が減る可能性がある。これではもっと働こうとする意欲は弱くなります。パートが働かない分は正社員が補わなければならない負担が増えます。そこで政府は奇策を考案しました。会社に一定の助成金等を支給し実質的に従業員負担をなくすか又は軽減させようというものです。岸田首相が厚労省に具体案の検討を指示したようです。

最低賃金や賃金引上げは会社のみならず従業員も大小の負担が発生します。日本社会はコロナ禍以降大きく変化することを求められています。経営者だけでなく、幹部社員他全社員の知恵を結集して、賃金アップを含めた労働条件の在り方について熱い議論を重ねて欲しいものです。

3. 出来る社長への道のり～創業前夜①～

ビジネスに携わっている人の何人かは「いつかは自分も社長に」と思っています。「隣の芝生は青い」の如く「経営者は楽しいな～」と思っている人もいます。今月から【出来る社長への道のり】を連載で綴っていきます。初回は創業前の話で「好きなこと、趣味を仕事にする」です。

「楽しんで儲ける」は「闇バイト」のようにハイリスクな着想です。幸運にもロケットスタートが切れても「悪銭身につかず」で短期間で事業は失敗することでしょう。一方「好きなことで起業しよう」というのは有りではないかと思えます。好きなことをしていると時間が経つのも忘れます。この「時間を忘れて物事に没頭すること」がビジネスで成功する為にも最も重要なことの1つと言えます。神様仏様から私達は公平に与えられたモノがあります。それは「時間」です。皆平等に一日は24時間であり一年間は365日なのです。有限な時間をどの様に使いこなすか。この時間管理能力が成功者と成功しない者との分水嶺なのです。

「好きなことをしている」と「ここはこうして、あれはああして」と改善案のアイデアが泉の如く湧き出てきます。起業は経営者一人でできますが、未来に向かって前進するには競争相手や採用を躊躇するお客様等のハードルがど～んと立ち塞がります。直接的又は間接的にこれらの壁を乗り越えるアイデアが無数に必要です。「好きこそ物の上手なれ」。この精神が起業の成功確率を高めます。